

活動基準原価計算による活動評価

Evaluation of Activity by Activity-Based Costing

トルヒナ・ヴェラ(国士舘大学大学院生)

I 伝統的原価の問題点

グローバル化経済では、企業の間で、厳しい競争がある。日本経済は、デフレ状況にある。それにもかかわらず、企業が利益を出す必要がある。この状況で、企業が生き残るため、不可欠なのが、製品を低価格で顧客に提供しようということである。市場の要請に答えるためには、組織が努力しなければならない点は、品質を損なわないで、品質レベルの高い製品を作ると同時に、原価の削減対策を執る必要性が発生する。

伝統的原価計算では、間接費の配賦の問題があって、正しく原価を把握していないということである。伝統的原価計算制度の原価に関して提供されている情報は、経営意思決定のために不十分である。

II 活動基準原価計算

企業は、遂行されている活動を通じて、目的を達成する。利益を生み出す組織には、活動に関して情報を集める、それから活動の管理が大切になる。

活動基準原価計算では、活動を通して、原価が生じている過程が明らかになる。これは、特にターニー (P.B.B. Turney) の活動基準原価計算のモデルでは、明示されている。

ターニーのモデルでは、活動が中心に置かれている。モデルの縦軸では、原価割り当てプロセスが、資源から活動へ、活動から原価対象へ見られている。横軸では、活動評価が行われている。ここで、活動ドライバー、活動遂行と活動業績評価が反映されている。

活動基準原価計算は、組織で行っている活動を、単位レベル活動、バッチ・レベル活動、製品支援レベル活動、工場支援レベルの活動として把握されている。各々活動は、相応しいコスト・ドライバーの適用によって、測定されていて、正しく評価できるようになった。

コスト・ドライバーとして、段取回数、運搬回数、発注回数、検査回数、そして作業時間、機械運転時間などが使用されている。時間は、活動ドライバーとして容易に付けられる。

活動コスト・ドライバーは、原価発生要因について語っている。コスト・ドライバーとコストドライバー・レートによって提供されている情報に基づいて活動改善を実施、遂行されている活動の効率の向上が行われている。

III 活動評価

ここで、活動ドライバー・レートの計算と活動ドライバー・レートの更新条件を見て、将来の原価対象、顧客に対して意思決定を執るのに、コスト・ドライバーとコストドライバー・レートの役割を論じる。予測されている製品販売量とサービス提供量に応じて、必要なアクティビティー遂行の識別と測定、それから資源種類と量に対して要求の明確さを示している。

これの加えて、コスト・ドライバーは、活動を引き起こす要因であるので、製造プロセスの非付加価値活動の識別、そしてこれらの活動な排除、効率的ではない活動に対して、効率性の向上のため、無駄な時間と努力を削減する。活動の中隠れている、はっきりしていない問題点を発見することを可能にする。

結 語

活動基準原価計算では、活動を通して、原価計算が行われている。活動基準原価計算による活動の透視化は、正確な原価測定、そして、正しい活動評価を可能になる。組織は、組織の目的を、活動を通じて遂行する。正確な活動評価は、経営意思決定のため、相応しい情報を提供して、正しい意思決定に役立つ。